

学会印象記

第43回日本免疫学会学術集会

2014年12月10日～12日

京都：国立京都国際会館

大会長：湊 長博（京都大学大学院医学研究科免疫細胞生物学）

増田 喬子

京都大学再生医科学研究所 再生免疫学分野

2014年12月10～12日までの3日間、京都大学の湊長博会長の下で第43回日本免疫学会学術集会が開催された。会場費を抑制するという目的で、数年前より幕張メッセもしくは神戸国際会議場で交互に開催されることが決定していた。しかし今回は、湊会長が地元での開催を強く望んだことに加えて、懸念された会場費も大きな問題にはならなかったことから、国立京都国際会館において開催が実現したとのことである。京都での開催は2008年以来6年ぶりであった。本学会は例年11月下旬もしくは12月上旬に開催されるため、今会期中も京都らしく底冷えのする気象であったが、2,000人超が参加するにぎやかな学術集会となった。

免疫学会は、午前中にオーバービュートークとシンポジウム(4会場)、午後にワークショップ(8会場)とポスターセッションというスタイルをとる。今回のシンポジウムは大きく「発生/分化」「獲得免疫」「自然免疫」「臨床免疫」という4つのカテゴリーを主軸に組ま

れたものであった。また一部のシンポジウムは、新学術領域研究班との共催、もしくは米国免疫学会がスポンサーとなつての共催であり、免疫学を中心としながら幅広い分野をカバーするものであった。筆者は、自身の研究内容に沿ったものとして免疫細胞の発生/分化に関わるシンポジウムやワークショップを中心に参加した。

Mark Davis博士(米国・スタンフォード大学)は胸腺内で起こる正の選択に関して、独自の見解を示した。自己に反応するT細胞は負の選択を受け、末梢組織にはほとんど見られないと考えられてきた。しかし末梢組織には外来抗原に反応するT細胞と同じ頻度で自己反応性T細胞が存在するという結果から、自己反応性T細胞が正の選択を受けるのは、外来抗原に反応できるT細胞の頻度を一定以上に保つためではないかとの説を提唱した。余談ではあるが、Davis博士はT細胞



図1 43rd JSI 湊会長挨拶



図2 43rd JSI ポスター会場